

# 心理学 ミュージアム



高雄医学大学心理学系（台湾） 副教授  
**櫻井正二郎**

*Profile* — さくらい しょうじろう  
Institute of Information Science Academia Sinica (Taiwan) 助手を経て現職。高雄医学大学図書館館長，高雄医学大学コンピュータセンター長，高雄医学大学心理学系主任。専門は知覚心理学，両眼視，心理学史。著書は『視覚與認知』（共著，遠流出版社）など。

## 台北帝国大学設立当時の台湾状況と心理学研究室紹介

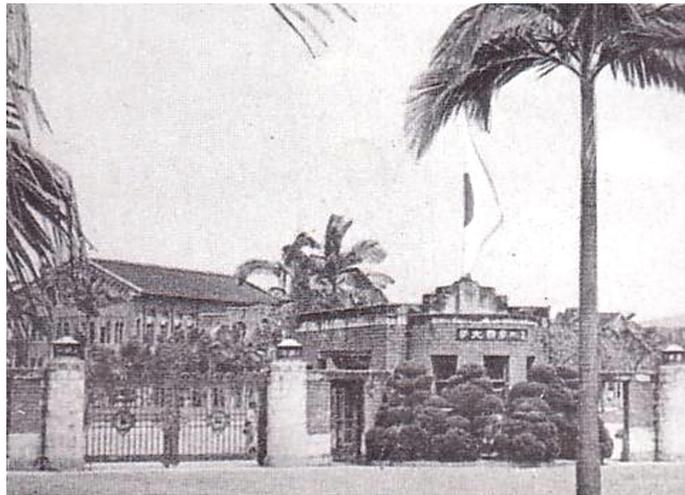


写真 1 台北帝国大学時代の校門

出典は、[http://zh.wikipedia.org/wiki/File:Taihoku\\_Imperial\\_University.JPG](http://zh.wikipedia.org/wiki/File:Taihoku_Imperial_University.JPG)



写真 2 写真 1 とほぼ同じ方位で写した写真（筆者撮影）

日清戦争の勝利にて、1895年の下関条約により台湾は清朝より日本に割譲されました。台湾は大日本帝国にとって初めての植民地であり、明治維新以来ようやく列強の一員になった象徴でもありました。台湾割譲は、台湾住民にとって寝耳に水の出来事で、当時の巡撫（＝知事にあたる職）唐景崧を大統領に推し、台湾民主国を設立しましたが、もともと烏合の衆、正規の軍隊の前にはたいした抵抗もできず、わずか5ヵ月で消滅し、台湾は日本に1895年11月に完全接収されました。しかし、その後各地で武力闘争が起り、1919年までは陸海軍の中将以上の軍人が台湾の総督に任命され、武力騒乱の撲滅にあたっていました。1915年の「西来庵事件」以後は、漢民族による騒乱は収束し、総統府の台湾各地のインフラ建設も、1908年の南北縦貫鉄道の開通、台北等の都市部での上下水道の建設、桃園地区の用水路網の建設等々、日本の台湾植民地統治も軌道に乗り始め、1920年頃より台湾大学設立の機運が高まってきました。1919年には初めての文官総督・田健治郎就任。台湾での大学設立に在任の日本人、台湾人の嘆願などもあり、田総督時代に、総督府に設立のチームが立ち上げられました。

台北帝国大学設立において、一番の功労者は、台北帝国大学初代総長を務めた幣原 坦しではらたいらと思われます。幣原は、総督府が大学設立を計画する以前より植民地教育に関心を寄せ、1910年代に多数の著書も残しています。またその「台湾大学設立ノ趣旨」において、この大学設立目的は、日本国の南方発展のため、南洋方面の人文科学や熱帯亜熱帯の疾病・食料等の自然科学の研究を担うためのものとししました。

1928年3月16日、台北帝国大学勅令第30号により設立。初めは、文政学部、理農学部の2学部。文政学部には哲学科、史学科、文学科、政学科の4学科、理農学部には生物学科、化学科、農学科、農芸化学科を設置。また、文政学部に国語学・国文学／東洋史学／哲学・哲学史／心理学／土俗学・人種学／憲法／行政法の7講座を設けました。写真1は台北帝国大学時代の校門で、写真2は2006年に撮影した現在の台湾大学の校門です。ご覧のとおり、80年以上経った今でも、設立当時のままです。唯一違うのは、掲げられている校名が、「臺北帝國大學」から「國立臺灣大學」に変わっただけです（奇しくも、字数も同じで、文字の方向が両方とも今と違い右から左の方向です）。

幣原の設立趣旨にもあるように南洋の人文科学の研究を任務としており、文政学部心理学、土俗学・人種学の講座を設立したことからもわかるように、心理学研究室（講座）は、民族心理学を主に研究目的にしたと思われます（研究成果は61号で紹介します）。また大学設立前後は台湾の総督府の資金繰りに相当の余裕があり、各講座の担当教授を海外へ派遣し、開講の準備を周到にさせたようです。心理学研究室初代教授、飯沼龍遠いひぬまりゅうおんも2年ほどドイツに出向き、各種の実験機器の購入の手はずをつけていたようです（実験機器については62号で紹介します）。

写真3は、『心理學研究』に掲載された、飯沼による心理学研究室紹介の図です。この建物は1933年に落成し、今も現存しており、文學院の先生の研究室になっています。竣工当時、心理学研究室は二階で、一階は土俗学・人種学のスペースで、主に土俗学・人種学標本資料等を展示していたとのこと。土俗学・人種学の助手みやまのぶひと、宮本延人によると、二階の心理学実験室には機械類が多数配置され、宮本自身が思い浮かべる心理学と違い驚いたと回想しています。

台北帝国大学には初めは予科がなく、植民地の帝大に内地から進学するものも少なく、台湾人入学には制限があり、学生数の非常に少ない大学でした。心理学研究室には、17年の間僅か4～5名の学生が在籍していたにすぎません。次回には心理学研究室の先生方が、台湾でどのような研究をしたのかを考査します。

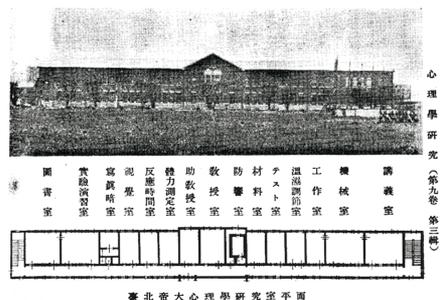


写真3 飯沼龍遠による台北帝国大学心理学研究室の平面図と外観（出典は、『心理學研究』第九卷，第三輯）